

## 堀河百首題「寒蘆」をめぐって

堀河百首題の冬の歌題は、既に、『堀河百首』成立以前に歌題としてあまり取り上げられない歌題が数多く含まれている。それら冬の二十歌題のうち「初冬」「寒蘆」「網代」「神楽」「鷹狩」「炭窯」「炬火」は、『堀河百首』成立以前に取り上げられない歌題として指摘されている。そのうち、冬の季節と関わりの深い歌題として「初冬」「寒蘆」「炬火」「炭窯」が挙げられる。それ以外の歌題は、『堀河百首』成立以前に冬の季節以外にも主題や歌材としてみられ、『同百首』において冬季の歌題となるには、様々な影響や理由が考えられるであろう。

今回は、冬の歌題の一つである「寒蘆」を取り上げ、この歌題を『堀河百首』詠出歌人達がどのように捉え、詠じたかを具体的に検討し、堀河百首題「寒蘆」の特徴を考察してみたい。

『堀河百首』成立以前において「寒蘆」がどのように詠まれていたかを調べてみよう。

『堀河百首』の歌題としては、「寒蘆」とされているが、『万葉集』以来歌材として一般的には葦と詠まれている。『万葉集』において葦が季節と共に詠み込まれているのは、管見の範囲では次の五首であり、いずれも、葦そのものではなく、葦の生えている場所である葦辺が詠まれ、春秋冬にみられ季節の限定はみられない。だが、冬

## 内藤愛子

季の詠歌が三首を占め、冬季の歌材として葦が好まれて詠まれていた傾向が看守される。

67葦辺行く鴨の羽がい霜降りて寒き夕は大和し思ほゆ

252葦辺には鶴がね鳴きて港風寒く吹らむ津乎の崎はも

234葦辺なる萩の葉さやぎ秋風の吹き来るなへに雁鳴き渡る

235おしするや難波堀江の葦辺には雁寝たるかも霜の降らくに

400家思ふと眠を寝ず居れば鶴が鳴く葦辺も見えず春の霞に

いずれも、鴨、鶴、雁等の鳥類と共に葦辺を歌材とした詠歌であり、『万葉集』において、葦は歌材とされている。

次に、堀河百首題と共通する項目が数多くみられる『古今和歌六帖』には、第六帖草の分類に葦の項目があり、六首(3818~3823)挙げられる。そのうちの(3819・3820・3823)は、貫之の詠歌であり、一首(3822)は万葉歌である。

3818 あしつのおひてしときにあめつちと人とのしなはさだまりに  
けり

3819 津の国の難波の葦の芽もはるにしげき我が恋人しるらめや

3820 人知れずもの思う時は難波なる葦のしらねのしらねやはする

3821 しらなみのよすれば靡く葦の根のうき世のなかはみじかから  
ん

382 おしてるや難波堀江の葦辺には雁寝たるかも霜の降らくに  
383 にはめの衣ほすとてかりてたく葦火の煙たたぬ日ぞなき

それら六首のうち季節が詠れているのは、その万葉歌（382）のみであり、しかも冬の季節の歌である。それ以外は恋歌などの人事詠の歌材として葦が詠まれており、『古今和歌六帖』においての葦は葦を主題とした歌よりも歌材として用いられている歌が多数を占めている。このことから、葦は主題として捉えるよりも歌材として認識されていることが知られるだろう。

初期の百首歌において、葦をみてみると、『重之百首』（『私家集大成中古Ⅰ』138）の冬の二十首のなかにも一首（287）みられる。また、『恵慶百首』（『私家集大成中古Ⅰ』104）の冬の十首の中に「葦」を詠じた歌が一首（229）みられる。

287 あしのはにかくれてすみしわかやとのこやもあらはに冬そきにける

229 つくまかはいりえにをしもさはかぬはあしのうらはにこほりしぬらし

重之の歌（287）は葦の歌であるが、恵慶の歌（229）は、水、おしどりと共に詠まれ、水鳥や氷の歌とも考えられ、あくまでも葦は冬の歌材の一つとして捉えられている。これら二首のうち重之の歌は、『曾根好忠集』（『私家集大成中古Ⅰ』105）にみられる葦の葉を詠じた二首の歌（113・307）に、少なからず影響を与え、重之の歌を継承し、発展したものと推察できるだろう。重之の歌は、『拾遺集』第四冬の部（387）にみられ、それは『堀河百首』成立以前の勅撰集において葦が冬の部立に詠まれている初出の歌である。

『好忠百首』では冬の十首に葦を詠じた歌は見らず、前述のように『曾根好忠集』の夏の部（四月中）、冬の部（十月中）に各々一首ずつ葦の葉を詠じた歌が見出だせる。

113 あしのはにかくれてすめは難波めのこやはなつこそすすしかりけれ

307 あしのはにちりにし日よりなにはえにかようしなさをさして見えつつ

いずれも葦の葉に注目し、葦の葉による夏と冬の季節の状況を詠みわけているのは興味深く、葦が冬の季節の限定された歌材と捉え難い。だが、前述の如く、『両百首』では夏の十首に葦の歌は詠まれておらず、少なからず、『両百首』では葦は冬季の主題として捉えていると言えるであろう。また、初期の定数歌や『曾根好忠集』は、月次屏風歌の素材・表現を摂取しているという御指摘がされている。<sup>(2)</sup> そのことから、『紀貫之集』（『私家集大成中古Ⅰ』57）における屏風歌をみてみると、一首だけ冬季に葦を詠んだ月次屏風歌が見い出される。それは、延長二年五月中宮の御屏風の和歌廿六首の中に「十一月芦刈積みたる所」とあり、

159 難波女の衣ほすとて刈てたく葦火の煙たたぬ日ぞなき

十一月の葦をよみ、冬季の素材として葦が見出だされる。『両百首』に冬季に葦を主題として詠じたは『紀貫之集』の月次屏風歌から摂取した可能性が考えられるであろう。

また、初期百首歌の系譜に位置付けられている『加茂保憲女集』（『私家集大成中古Ⅰ』121）の冬に

120 かけみえてな<sup>シイ</sup>れしあしも冬くれはまれにくらしな人やすさめぬ

とあり、葦を冬の主題として捉えていることができる。

このようなことから、初期百首歌において葦は冬季の主題として意識されていたと捉えることが充分可能であろう。

次に、『堀河百首』成立以前の歌合における葦の歌題をみてみよう。『同百首』成立以前の歌合で冬の歌題として蘆の初出は、長暦

二年晩冬 権大納言師房歌合（『平安朝歌合大成』125）の「葦」に  
11 津の国の難波わたりに知らねども葦をしるしにたづねてぞゆく  
とあり、長久二年五月十二日庚申祐子内親王名所歌合（『平安朝歌  
合大成』130）の「筑摩江の芦」承保二年八月二十日撰津守有綱歌合  
（『平安朝歌合大成』198）四番蘆がみられる。

補7 筑摩江の玉江の芦のよたけきも雁の水搔きに下枯れにけり

7 難波江にまだき初雪ふりにけり葦の穂にいでてしげき汀は

8 難波潟芦刈り小舟なかりせば水にきえせぬ雪とこそ見ぬ

いずれの歌合においても、寒蘆という歌題ではなく葦という歌題  
ではあるが、冬の歌題の一つとされており、冬の歌題として定着傾  
向が認められるだろう。

先に触れたように、『堀河百首』成立以前の勅撰集において冬の  
部で葦を主題とした歌は『拾遺集』第四冬に重之の歌（223）が一首  
配列されているのみであり、他の勅撰集には冬の主題としてみられ  
ない。また、『堀河百首』成立以後、勅撰集において冬の歌題とし  
て「寒蘆」の初出は『新古今集』（625、626）まで見られない。

223 あしのはにかくれてすみしつのくにのこやもあらはに冬はきに  
けり

以上のことから、『堀河百首』題「寒蘆」は、冬の歌題として選択さ  
れるに当って、歌合において葦の歌題が冬季に定着したことの影響  
に拠ったものと捉えられ、長暦二年晩冬権大納言師房歌合には冬の  
歌題として見えることから比較的新しい歌題と言えるだろう。そし  
て、葦が冬季の歌題として定着に当って初期百首歌の影響は無視で  
きないであろう。また、『堀河百首』題「寒蘆」の選択に際して、既に  
家永香織氏が指摘のように屏風歌や、初期百首歌を参考にしたと  
も考えられるであろう。<sup>3)</sup>だが、「葦」という単題せず、「寒蘆」とし  
たのは、漢文の影響が考えられ、冬枯れ葦に着目した歌題であり、

堀河百首題の選者が歌題に対する工夫の一つといえるであろう。

『堀河百首』詠出歌人達は、どのように歌題「寒蘆」を捉え、詠じ  
たかを具体的に検討を加えてみよう。

堀河百首題「寒蘆」の十六首のうち、十一首が歌枕、地名を詠み  
入れている。葦と歌枕、地名を詠んだ歌は『万葉集』以来見られ、  
それら十一首の歌に詠まれた歌枕、地名を挙げてみると、難波潟は  
五首（966・968・970・974・975）、難波江（967）と難波に関する歌枕が  
六首あり半数以上を占めている。玉江は二首（962・963）あり、津の  
国須磨（964）、菅田の池（969）、三島（967）は各々一首づつである。  
それら各々の歌枕、地名について具体的に検討を加えてみたい。

まず、難波を取り上げてみよう。難波は、摂津の国の歌枕であり、  
葦の名所である。難波と葦との組み合わせによる歌は、『万葉集』  
（2135）以来、数多くみられる。堀河百首題「寒蘆」において難波潟  
を詠み込んだ歌はつぎの五首である。

966 よもすがらあなし吹くなり難波潟塩あしに浪の花やさくらむ

968 難波潟つなでになびく葦のほのうら山しくも立ちなおるな

970 難波潟汀おしなみふる雪をおもげにたわむあしの下折

974 難波潟葦のほすゑに風ふけばたちよる浪のはなかとぞみる

975 遠方に家あやすらん難波潟あしかりぶねをしげく行きかふ

難波潟は、勅撰集において『古今集』より詠まれ、難波潟と葦と  
の組み合わせに拠る歌は『後撰集』より数多くの例歌を挙げることが  
でき、難波潟と葦は伝統的な歌枕と言えるであろう。

難波江を詠じたのは藤原仲実の歌である。

967 難波江の浪になつさうしをれ葦のけさ潮風にさえてみゆらん  
勅撰集において、難波江と葦の組み合わせに拠る初出は、『後拾遺  
集』（49）の曾根好忠の歌であり、恵慶法師の『拾遺集』（537）にも

難波が葦にかかる枕詞的に使用に拠った歌である。また、恵慶法師や曾根好忠の頃から難波江の歌例を挙げることができることから、難波江はその時期に詠まれていたことが知られる。このようなことから、時期的に難波江は、難波潟より後に歌枕として定着されたと捉えられるであろう。

難波江は、「寒蘆」の歌題の歌には一首のみであるが、他の堀河百首題にも葦との組み合わせで詠まれている。

177つのぐめるあしのわかばをはむ駒のあるるをみるや難波江の人  
(春駒 藤原公実)

465難波江の草葉にすだく蛩をばあしまのふねのかがりとやみん  
(蛩 藤原公実)

いずれも同歌人であり、難波江と葦の組み合わせに拠って異なる歌題の歌がみえることから百首歌を詠むことの苦慮が窺われ、難波江は少なからず関心のある歌枕といえよう。また、177の歌と「寒蘆」の藤原公実の歌(961)は同様に葦と駒による詠歌である。

このように、難波潟や難波江は従来ある歌枕との組み合わせによって冬枯れの葦の風情を詠じていると言えるであろう。

次に、玉江をみてみよう。玉江は、『万葉集』より詠まれているが、万葉歌の玉江は歌枕ではなく、すばらしい入り江と解されて、歌枕としての玉江は、越前国と摂津国という両説にわかれている。

勅撰集において、玉江と葦に関連した「芦刈り小舟」と共に詠んだ歌は、『後撰集』<sup>129</sup>が初出であるが、玉江と葦の組み合わせによる初出は『後拾遺集』の源重之の歌(219)である。

<sup>129</sup>玉江こぐ芦かりを舟さしわけて誰をたれとか我は定めん

<sup>219</sup>夏かりの玉江の葦をふみしだきむれあるとりのたつそらそなき  
堀河百首題「寒蘆」において玉江を詠じたのは次の二首である。

<sup>962</sup>しもがれて花はちりぬとみしかども玉江の葦は冬ぞたえせぬ

<sup>963</sup>まこもかる玉江の葦も霜がれて深くも冬の成りにけるかな

この二首の玉江は、『堀河百首』詠出歌人である隆源の『隆源口伝』において、重之の歌(219)に「玉江の蘆とは越前國にある所をいふ」とあり、また、源俊頼の『俊頼髓脳』においても同歌をあげて「玉江とは越前の國にある所なり」とあることから、この二首の玉江は、越前の国の歌枕と捉えてよいであろう。

この二首のように、玉江と葦の組み合わせによる歌例は少なく、重之の歌(219)を意識した歌であり、しかも、二首は共通した歌語「霜枯れ」「玉江の葦」「冬」に拠る詠歌であり、なんらかの影響関係が考えられよう。

玉江は『堀河百首』以前に歌例が少なく、『歌木奇歌集』(『私家集大成中古Ⅱ』62) 317・158や『基俊集』(『私家集大成中古Ⅱ』69) 3に詠歌がみられ、また、『金葉集』130に公実の歌が見出されることから、『堀河百首』の詠出歌人達には注目された歌枕と言えよう。また、玉江と葦を詠み入れた詠歌は『金葉集』137にみられる。このように、玉江の葦は『堀河百首』以後、歌例がみられることから定着の傾向が窺われるだろう。

津の国の須磨を詠じたのは源師頼の歌である。

<sup>964</sup>津の国の須磨の浦風ふくたびにしをれし葦のおとのみぞする  
この歌は、津の国の須磨の萎れた葦を聴覚的に表現している。

津の国は、淀川の西一帯を指している。津の国を枕詞的に使用し、難波・昆陽・長柄などの地名を続け、共に詠まれている。しかも、難波・昆陽と共に葦を詠み込んだ歌は、『古今集』以来数多くの歌例が見出せる。だが、津の国に須磨を続けて詠じているのは『堀河百首』以前に歌例がなく、この源師頼の詠歌のみである。それは、津の国と難波・昆陽のような既成の地名を続けるではなく、須磨と言う先例のない地名を津の国と続けることに拠って新奇さを求める

姿勢が窺われるであろう。また、『堀河百首』以降にも歌例が見当たらず、歌枕として定着の傾向はみられない。

このように、津の国の須磨は新奇な地名の繋りに拠る独自性のある歌枕と言えるであろう。

菅田の池を詠じたのは源師時の歌(969)のみである。

969おく霜においたる葦の枯れふしてすがたの池にあらはれにけり  
菅田の池は、大和の国の歌枕で、菅田に姿を懸けている。『堀河百首』以前の歌例は少なく、例えば、『相如集』(『私家集大成中古Ⅰ』130)に

27いひいてはそらもやはちむやまとなるすかたのいけのかけのた  
かはぬ

28やまとなるすかたのいけにうきさるのまさるをきみか影をこそ  
みれ

とあり、菅田に姿を懸けている早い歌例と思われる。また、『相模集』(『私家集大成中古Ⅱ』29)には、「すがたの池にて」という詞書もみられ、やはり菅田という音に注目した歌といえるであろう。

106ゆく人のすかたのいけのかけみればあさいぞそのしるしなり  
ける

だが、『堀河百首』においては「蓮」の歌題の源師頼の歌に、

500少女子が菅田の池の蓮葉はこころよげにも花咲にけり

とあり、『散木奇歌集』においては二首みられる。

108わきもこがすがたのいけをみつるよりなみのたちるに物こそ思  
へ

109うらやましいかなるかもわきもこがすがたの池にうきねしつ  
らん

また、『堀河百首』の歌人である師頼の天仁二年冬右兵衛督師頼歌合(『平安朝歌合大成』260)の水鳥に

3夜を重ね睡こそ寝られぬ吾妹子が菅田の池の鴛鴦の羽風に

とあり、やはり、「吾妹子が菅田の池」が詠まれている。これら師頼と俊頼の歌は「わきもこがすがたのいけ」と「少女子がすがたのいけ」というように女性の姿にと菅田を懸けるパターンの一つとして受けとれるだろう。詠出に当たって、詠法を工夫や情報の変換で  
きる状況が充分推測できるだろう。また、いずれも菅田の池と葦の  
組み合わせによる歌ではなく、菅田に姿を懸けた歌枕として詠まれ  
ている。このように、菅田の池は『堀河百首』詠出時代には注目さ  
れた歌枕であり、女性の姿に懸けるといふ工夫がなされたと言える  
だろう。

三島は、三島江と同様に摂津の国の歌枕である。三島江が詠まれ  
た歌例は『万葉集』の132(『拾遺集』122)にみられる。勅撰集にお  
いて三島江と葦の組み合わせの初出は『後拾遺集』42の好忠の歌で  
あり、歌例の数は少ない。また、三島江が詠み入れた歌例の数も少な  
く、勅撰集においては『拾遺集』(976)にみられるのみである。そ  
の詠歌は、三島に見し間を懸けた歌枕である。

976ほのかにもわれをみしまのあくたひのあくとや人のおとすれも  
せぬ

堀河百首題「寒蘆」で三島を詠み入れた歌は、河内の歌一首のみ  
である。

976よそにのみ三島の葦のねを絶えてかりにたにやは今とはびくる  
この歌は、三島に見し間を懸け、『拾遺集』の122の歌に発想の典  
拠を求め、「葦の根」の歌語は『後拾遺集』42の好忠の歌に拠って、  
訪れてくれない人を恨みを詠じている。

『後拾遺集』42(『曾根好忠集』3)に

42三島江につのくみわたる葦の根のひとよほどにはるめきにけり  
また、『堀河百首』詠出歌人の源俊頼の『散木奇歌集』(147)に

1467 いささめにみしまはかりをなくさみてえもうらなれぬしをれあ  
しかな

とあり、三島と葦の組み合わせによる人事詠歌であり、三島は見し  
間を懸けた歌枕としている。

このように、三島は歌枕として歌例が少なく、新奇なものと言え  
るであろう。だが、三島は『堀河百首』詠出歌人達に注目された歌  
枕と言えるであろう。また、三島は『堀河百首』以後にも歌例が少  
なく歌枕としての定着する傾向はみられない。

以上のことから、葦と歌枕や地名を読み込むことは、万葉歌から  
みられる伝統的な詠法であると言えるであろう。だが、堀河百首題  
「寒蘆」においては既成の歌枕として難波潟・難波江が挙げられる。  
『堀河百首』以前には歌例の少ない歌枕としては、玉江・菅田の  
池・津の国の須磨・三島が挙げられ、そのうち、菅田の池・三島は  
懸詞としての歌枕として用いられている。殊に、津の国の須磨は源  
師頼の歌のみであり、新奇な独自性のある歌枕、地名と言えるであ  
ろう。このように新しい歌題である「寒蘆」を従来の歌枕ではない、  
新奇な歌枕によって詠もうとする詠法の工夫が窺えるだろう。

次に、「寒蘆」における歌材の特徴についてみてみよう。十六首  
すべて葦や葦に關しての歌語が詠み込まれている。「葦」が詠み込  
まれているのは六首（962・963・965・969・970・973）あり、「葦の穂」  
は二首（968・974）、「葦の根」は一首（976）、「しをれ葦」は四首  
（961・964・966・967）、「流れ葦」は一首（971）ある。葦に關しての歌  
語として「葦刈る人」を詠み入れたのは一首（972）あり、「葦刈り  
小舟」は一首（975）みられる。

「葦」を詠み入れた六首は、いずれも霜・枯れる・雪などの冬季を  
表す歌語と共に冬枯れの風情を詠んでいる。

『堀河百首』において「なかれあし」を詠まれているのは藤原基俊  
の歌一首のみである。

971 塩風にしをれにけりなながれ葦のおきふし春を待つとせしまに  
この歌は、既にご指摘されているように「加茂保憲女集」に

142 風ふけはなみのしめゆうなかれあしのふしおきこひにしづむこ  
ろかな

とあり、「ながれあしのおきふし」は、保憲女の歌「ながれあしふ  
しおき」の表現を求めているとされ、また、「ながれあし」基俊の  
詠歌のみでなく、公実の『千載集』792（『堀河院艶書合』）国信の  
『源中納言懷旧百首』、俊頼の『散木奇歌集』147に詠まれており、堀  
河百首詠出歌人達に影響を与えたとされている。<sup>4</sup>

792 満つ潮にすえ葉を洗ふ流れ葦の君おぞ思ふうきみ沈みみ

なかれあしのことのはかかれてのちよりはたたしたねのみのこ  
るなるけり

1467 なかれあしとうき事をのみしま江跡ととむへき心地こそせね  
このように、「ながれあし」は、やはり保憲女の歌に典拠を求め  
た歌語と思われる。

「しをれ葦」を詠んでいるのは一六首のうち四首（961・964・966・967）  
である。

961 霜がれの野辺のほとりのしをれ蘆いきかう駒もすさめざりけり

964 津の国の須磨の浦風吹くたびにしをれし蘆のおとのみぞする

966 よもすがらあなし吹くなり難波潟塩あしに浪の花やさくらん<sup>5</sup>

967 難波江の浪になづさふしをれ蘆のけさ潮風にさえてみゆらん

「しをれ葦」は、『堀河百首』成立以前に管見の範囲では歌例は見え  
ず、新奇な歌語と言えるだろう。だが、『同百首』の水鳥の歌題の

俊頼の歌（『散木奇歌集』643）に、

1016 しをれ葦ふしはかしたにあさりする鴨うきよを流れてそふる

とあり、冬季の歌語として見え、『散木奇歌集』において贈答歌(1407・1408)にも詠まれ、俊頼の詠歌に数多く見られる。また、『同百首』の歌人達には注目された歌語と言えるであろう。既に、三角洋一氏が御指摘のように、967の仲実の歌の三句目「しをれ葦」を「みだれ葦」とする異本があり、この歌が、「みだれ葦」の初出の歌とされている<sup>(6)</sup>。

このように、「しをれ葦」は『堀河百首』詠出の歌人達において歌語として詠まれ、『同百首』以降、冬季の歌語として歌例が見られ、定着化がなされたと捉えられるであろう。

次に、「葦の穂」を見てみよう。やはり、「葦の穂」は、『堀河百首』以前にあまり詠まれていない歌語である。管見のうち早い歌例としては、『小馬命婦集』(『私家集大成中古I』91)6、『重之百首』(歌仙家集本)秋の二十首の中(276)に

6ひとしれぬかせとやたのむあしのほのけふはまほにもいてにけるかな

276秋風にしほみちくれは難波江のあしのほよりそふねもいきける  
とあり、重之の歌において、「葦の穂」は秋季の歌材としている。  
また、葦を詠み入れた『重之百首』(歌仙家集本)の春の一首(222)の中に

222なにはえにおひいつるあしのほとみればかすしらぬよそおもひ  
やらるる

とあり、「あしのほと」のほに穂を懸けていると捉えることも可能であろう。このような技巧的な詠法に拠る歌として、『首根好忠集』436、『相如集』(『私家集大成中古I』130)19等が挙げられ、「葦の穂」は季節に限定のない歌材として捉えられるだろう。

堀河百首題の「寒蘆」に「葦の穂」を詠み込んだのは二首(968・974)あり、その二首は冬の歌題であるのに冬季の歌材を詠み入れず、

季節の限定しない歌材として「葦の穂」を詠み入れている。

968難波濁つなてになひく葦のほのうら山しくも立ちなほるかな

974難波濁葦のほすゑに風ふけはたちよる浪の花かとそみる

いずれも、冬の葦は詠じていない。俊頼の歌(968)は靡いては立ちかえる葦の穂の様子に哀嘆の情を効果的に表現し、訴嘆の歌に仕上げられている。その歌は、歌題「寒蘆」においての特徴的な一首と言えよう。

肥後の歌(974)は葦の穂を浪の花に見立ての技法で詠んでいる。このように、「難波濁」、「浪」、「葦の若穂」による詠歌が承保二年九月内裏歌合(『平安朝歌合大成』199)晩秋の歌題である芦花の12の歌に、

12難波江にひまなくよする白浪と見えうちまかへ葦の若穂の

にみられ、常套な歌材による歌と言えるであろう。だが、「葦の穂」の歌材は秋季の歌材として見え、冬季の歌としては捉えにくいであろう。また、前に触れた承保二年八月二十日撰津守有綱歌合の葦の歌題には、「葦の穂」と共に「初雪」が詠まれおり、冬季の歌と受け取ることができるだろう。

『堀河百首』成立以降において、「葦の穂」の歌例がみられ、殊に、『千載集』の冬部、千鳥の歌材として詠まれ、「ほのほの」のほに穂を懸ける技巧に拠る詠歌が見られる。

428しもがれのなにはあしのほのほのとあくる湊に千鳥鳴くなり  
「葦の穂」は、冬の歌材として用いられ、冬季の歌材として定着の傾向がみられるだろう。

このように、「葦の穂」は、季節の限定がなされていないが『堀河百首』詠出時期には「葦の穂」を冬の歌材として捉えていたと知られ、歌材としての季節の限定がみられる。『同百首』以降においては、冬の歌材として定着化が看守されるであろう。

次に、「葦の根」を見てみよう。「葦の根」は『万葉集』から詠まれている歌語である。前述のように『堀河百首』では、肥後の詠歌のみであり、しかも、好忠の歌（『後拾遺集』42）の影響を受け、「葦の根」の根に寝や音を懸けて、懸詞を屈指して恋の恨みを技巧的な歌に仕上げている。

「葦刈る人」を詠み入れたのは、永縁の歌のみである。

972霜枯れの葦刈る人のやどなれど八重がきにしてすまふなりけりとあり、「葦刈る人」は『堀河百首』成立以前には、歌例がみられない、新奇な歌語と言えるであろう。

この詠歌は『堀河百首鈔』において、『大和物語』の148話の蘆刈を基とした詠歌としている。だが、この詠歌は、葦刈る人が葦の冬枯れるのを待って刈ることを基とし、刈った葦を積んだ住まいの在り様を詠じている。

この歌の「八重垣」は、『記紀』より詠まれた歌語であるが、管見の範囲では、『堀河百首』以前には歌例はみられなく、『同百首』の歌題「山家」の源頭仲の歌に、

幽山がつのあしの八重垣八重葎ことわりなれや人の分けこぬとあり、「葦の八重垣」によって山賊の宿が表されている。

また、『同百首』以後「八重垣」を詠み入れた歌が、永久四年四月四日白河院鳥羽殿北面歌合の卯花の歌題の藤原仲実の歌にみえる。

2卯花の咲けるさかりの八重垣をたれ山賊の宿とみるらむ

このように、「八重垣」が葦刈る人や山賊のような貧しい人の宿を表現している。『堀河百首』詠出歌人達には、「八重垣」が貧しい人の宿を表す歌材として捉えていると言えるだろう。また、「葦刈る人」や「八重垣」は、『同百首』以降、歌例は少なく、定着の傾向がみられないと言えるだろう。

葦に關係する歌語として「芦刈り小舟」が挙げられる。「芦刈り

小舟」は歌材として勅撰集においての初出『後撰集』図にみられる。だが、『万葉集』や『古今集』にはみられない歌材である。

図玉江こぐあし刈りを舟さしわけて誰をたれとか我は定めん

この詠歌おける「芦刈り小舟」は人事詠の歌材として用いられている。「芦刈り小舟」が季節詠の歌材として詠みこまれた歌例は数多くみられない。

歌題「寒蘆」において「芦刈り小舟」を詠じたのは紀伊の歌一首のみである。

975遠方に家ゐやすらん難波湯芦刈りふねしげく行きかう

この歌は葦の関連する歌語に拠る歌で、芦刈りは葦が枯れてから行うことから「芦刈り小舟」が冬季の歌材と捉えられている。しかも、この歌はやはり、葦刈る人に視点をおき、前述の『重之百首』（歌仙家集本）276の歌に影響を受けたものと推測できるだろう。

冬の歌題として葦において、「芦刈り小舟」を詠じたのは、承保二年八月撰津守有綱歌合の歌（8）にみられ、承保三年九月内裏歌合の晩秋の歌題として芦花の歌（11）に詠まれている。「芦刈り小舟」は葦の歌題の歌材として認められていたことが知られ、晩秋から冬の季節に用いられていたことが判るだろう。

8難波湯芦刈り小舟なかりせば水にきせぬ雪とこそ見ぬ

11ほのかにも浪よる川や見えつらん芦刈り小舟こぎて来るは

また、『堀河百首』の晩の歌題の源頭仲の歌（1286）にも詠まれている。

1286暁に成りにけらしなとまふきの芦刈り小舟島つたうなり

このように、「芦刈り小舟」は葦の歌題に詠まれる葦と関連のある歌材と意識され、しかも、晩秋から冬の季節に詠まれていたことが看守される。恐らく、「芦刈り小舟」は葦刈りの冬の季節に詠まれた歌語で冬季を表す歌語と捉えられていたのであろう。



以上のことから、歌題「寒蘆」を詠むに当って単なる「葦」でなく、具体的に葦の状態を表す新奇な歌語として「流れ葦」、「しをれ葦」や葦の部分を示す歌語として「葦の穂」、「葦の根」を用いたり、葦に関係する歌語として「葦刈る人」や「芦刈り小舟」を用いて詠み入れている。このように、あまり使用されていない歌語や新奇な歌語の使用は歌に広がりを持たせるための詠法の工夫として捉えられるだろう。

次に、『堀河百首』の「寒蘆」の十六首において、風に関する歌語および風情を詠み入れている歌が多くみえる。「浦風」「あなし吹く」「風」「塩風」「靡く」等が挙げられ、葦の風に吹かれる様子を聴覚的な表現によって詠んでいる。

このように風に関する歌語を用いる詠法は、『万葉集』以来みられ、伝統的な詠法と言えるであろう。

次に、「寒蘆」の十六首において、特徴的な発想に拠る詠歌を挙げてみよう。この二首は、藤原公実の歌(961)と藤原顕季の歌(965)で、葦と駒が詠まれている。

961 霜枯れの野辺のほとりのしをれ葦は行きかう駒もすさめざりけり

965 のがひせしあしもまばらにかれはててくきのわたりもさびしかりけり

とあり、いずれも影響歌が見出だせる。まず、961の歌は、『古今集』892を影響歌として挙げられよう。

892 大荒木の森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなしとあり、「駒もすさめず」は、この歌の影響と言えるであろう。また、前述のように公実は『同百首』春駒の歌題において葦と駒を詠じた歌(177)が見出だされる。

次に、965の歌を取り上げてみよう。この詠歌の初句「野がひせし」

は、『曾根好忠集』冬、十月に

282 野飼ひせし小笹か原も枯れにけりいまはわか駒何につなけんとあり、冬の枯れ野の駒が読まれている。「野がひせし」とあることからこの詠歌の影響を受けたものと考えられ、しかも、葦の縁語として「くき」があり、その「くき」が「葦」と「岫」と懸けて、技巧的に冬枯れの葦と共に冬の寂しさを詠じている。また、『好忠百首』の春の歌に

448 野飼ひせし駒の春よりあさりしに尽きすもあるかな淀の真菰のとあり、好忠は、歌材として「野飼ひせし駒」に注目していたと考えられる。前述の『堀河百首』の春駒の公実の歌は「淀の真菰」を難波と葦に変え、駒との組み合わせによる歌として捉えられ、やはり、好忠の歌の影響は無視できないものと考えられるであろう。

以上のように、『堀河百首』において、葦と駒の組み合わせによる歌が見られ、『同百首』の詠出時には注目された歌材の組み合わせであり、特徴的な詠法の一つと言えるだろう。それは、少なからず、好忠の歌の影響の可能性によるものであろう。

歌題「寒蘆」の十六首において、冬季の歌材・表現を用いずに詠んでいる歌が三首(968・974・976)見出だされる。そのうちの二首は前述の如く、「葦の穂」を詠じた歌(968・974)であり、その他の一首(974)は河内の恋の恨みの歌で、この歌は「寒蘆」という歌題からすると、冬枯れの葦を主題として詠じていない。これらの歌は少なからず、「寒蘆」の特徴的な歌として挙げて良いであろう。

また、特徴的な詠歌としては、既に、竹下豊氏が御指摘のように、叙景的傾向をもつ名所歌枕詠として藤原顕仲の歌を挙げられる。

970 にはがた汀おしなみふる雪をおもげにたわむあしの下折次に、「寒蘆」の十六首において、特徴的な歌語による詠歌として、隆源の歌(973)が挙げられる。

973冬さむみすゑの枯れ葉も落ちはててもとしのばかりたてる蘆かな

四句目の「本篠ばかり」の「本篠」は、管見の範囲では『堀河百首』以前には詠まれた歌例は見つからず、新奇な歌語に拠った詠歌であり、葦が枯れて篠のように立っている様子を詠じいる。このように、「本篠」は特徴的な歌語として挙げられるだろう。

以上のように、歌題「寒蘆」の詠歌の特徴としては、難波潟と葦というような既成の類型化された歌枕のみでなく、「津の国須磨」のような新奇な歌枕、独自の歌枕が見られる。また、歌語においては、殊に、枯れた葦を表す「しをれ葦」「流れ葦」「みだれ葦」のようあまり詠まれていない歌語や新しい歌語に拠る詠歌がみられる。それらは、『堀河百首』詠出歌人達の新しい歌題を詠むための新しい表現の追求と捉えられる。また、このような新奇は歌語や詠法の工夫に当たっては、情報の交換などがなされていたのではないかと推測されるであろう。

『堀河百首』成立以前において、葦は冬季の歌題としての歴史が浅く、歌材として葦は『万葉集』以来詠まれており、冬季の限定が見られない。堀河百首題「寒蘆」の詠出において、枯れた葦を扱わない歌のなかには「葦の穂」のように季節の変更が見られたり、枯れた葦を叙景的に仕上げている歌も見られる。このように、新しい歌題を詠むに当たり、詠出歌人達の苦吟する様子が窺うことができる。また、『同百首』成立以降、歌題「寒蘆」は、既に調査した新奇な歌題「鷹狩」「神楽」のような冬の行事の歌題として定着がみられるのと異なり、冬の独立した歌題として定着するよりも冬の歌材の一つとして「葦」を捉えられている傾向が看守される。<sup>(8)</sup>これも歌題「寒蘆」の特徴の一つを示していると言えるであろう。

#### 〔注〕

- (1) 橋本不美男、滝沢貞夫著『校本堀河院御時百首和歌とその研究 本文研究篇』(昭51 笠間書院) 参照。
- (2) 松本真奈美氏「曾禰好忠「毎月集」について―屏風歌受容を中心に―」(『国語と国文学』平三年九月号) など。
- (3) 家永香織氏「『堀河百首』と屏風歌・初期定数歌」(『国語と国文学』平十年四月号)。
- (4) 三角洋一氏「『波のしめゆふ』小考」(『国文白百合』12号 昭56・3) 渦巻 恵氏「『加茂保憲女集』再評価」(『中古文学』第57号)。
- (5) この歌の四句目「塩あしに」は橋本不美男、滝沢貞夫著『校本堀河院御時百首和歌とその研究 本文研究篇』に拠ると諸本において「しほれしあしに」とある。
- (6) 三角洋一氏「『波のしめゆふ』小考」(『国文白百合』12号 昭56・3)。
- (7) 竹下 豊氏「『堀河百首』の名所歌枕詠堀河百首研究(5)」(『女子大文学 国文篇』第40号)。
- (8) 拙稿「堀河百首題「鷹狩」をめぐって」(『本学研究紀要』第39号)、拙稿「堀河百首題「神楽」をめぐって」(『本学研究紀要』第41号) 本文に引用した『万葉集』、『古今和歌六帖』、『堀河百首』、勅撰集は、『新編国歌大観』(歌番号も同本に拠る。)に拠った。ただし、表記については改めたところがある。